

# うたそら

第  
14  
号

2023  
May

5

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	03
テーマ詠欄「本」	18
一首評「そらよみ」	22
短歌リレーコラム「望遠鏡」	24
短歌でまちがいさがし	25
リレーエッセイ「いちごいちえ」	26
次回予告・編集後記	27

うたそら 第14号

発行：2023.05.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi\_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>

Twitter ハッシュタグ #うたそら

「うたそら」では Twitter での感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告

連作欄 8首の連作 自由詠  
 テーマ詠欄 「短」  
 一首評 「そらよみ」  
 短歌リレーコラム 「望遠鏡」  
 リレーエッセイ 「いちごいちえ」

短歌募集



第15号 '23 6/30 (金) 24時

• 8首の連作 自由詠 • テーマ詠「短」1首

第16号 '23 8/31 (木) 24時

• 8首の連作 自由詠 • テーマ詠「月」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください  
<http://kohagiuta.com/utasora/>

編集後記

ツツジやハナミズキの咲き誇る季節となりました。道沿いなどあちこちに白やピンクの花が見られて、すっかり春なのだなぁと実感しています。皆さまはいかがお過ごしでしょうか。わたしが住む滋賀ではGWにいつせいに田植えが始まります。そのために今田んぼには水が張られていて、この時期にしか見られない大きな水鏡が美しい景色を作り出しています。あと数日で見られなくなってしまうのが少し残念です。次号は7月発行です。テーマ詠のお題は「短」。たくさんのおすてきな作品や一首評など、お待ちしております！

編集員 千原こはぎ

今号のうたそら 第14号

- 参加歌人様 70名
- 連作欄 57名
- テーマ詠欄 55名
- 一首評 6名

ご寄稿いただきありがとうございます！

コラム 湯島はじめさん  
 エッセイ 山桜桃えみさん



illustration: kohagi chihara



大村健太	@subjperf	寿司村マイク	@HksbNR4w1wY8M	まぢけ	@mskmpomfuwa23
緒方燕柳	@OGATA_Enyu	たえなかず	@suzusuzu2009	深影コトハ	@cotoha_mikage
音平まご	@nandemonaihi16	多香子	@akahashi_r5	水也	@m_lya_o
歌島孟	@Sim11990	高橋良	@Moimoi_ayaka	宮岡りょう	@myao_rrr
からすまゐ	@inari_kasuma	田中りな	@kohagi_tw	深山睦美	@5757_77575
川嶋さち	@kareido1111	千原こはぎ	@moon_grass12	三好碧	@miyoshimidori
河岸景都	@sachiosha	月草俣津久	@croissant_hey_z	虫武一俊	@mushitake
北谷雪	@kate_kawajishi	つちこて	@nakam8	村田一広	@mucc12022
橋高なつめ	@kitaya_misomiso	ともえ夕夏	@magu_na88889	森内詩紋	@Nj40Ev95gJcRpu
砧	@coconutkikko	中村成志	@jacky244Ray	杜野詩季	@4kitankass5
君村類	@kmmr_r09	奈瑠太	@nalda_aa	優木つま	@yukigomao
久助	@nTbIm64shItap	西淳子	@aie0himeco	湯島はじめ	@hajime_yu11
くろだたけし	@tkuro2016	薄荷。	@orix2010	れいあむ	@Re14m_bot
佐藤水魚	@satoho_tanka	ひな	@hirochin_dos	臙	@rou_tanka
サラダベートル	@kyokousalad	ひな	@momoka_fukuyama	和	@hrm143ponta
汐射ハルカ	@shiori_haruka	福山桃歌	@kofujishu_tanka	waka_no	@Cathy01207758
鹿ヶ谷街庵	@kikasamabakuchi	藤尾舟	@Penguinjumping	和	
西鎮	@xi_zhen_ivUT	かじはる	@mao_or_nana	和	
雀来豆	@jacksbeans2	真岡まな		和	
白石夜花	@yohana_no_sekai			和	

計70名

たくさんのお参加ありがとうございます！

14

リレーエッセイ

# いちいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んで  
それをテーマにエッセイを書くページ  
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ 聞かせて

書き手 山桜桃 えみ

他人を未読の小説のようにとらえている節がある。自らはたらきかけによって大きな影響を与えようとはしないものの、紙の頁を隔ててそれを繰る手は止まらない。

長いこと、自分は人が好きではないのだと思っていた。大人数での会合も、社交辞令や駆け引きをはらんだSNSでのやりとりも、恋だ愛だと踊る心も、人とかかわりによって生まれるあらゆることが面倒で仕方なかった。人を嫌えば生きづらいという理由でコミュニティの中でも無党派派を保っていた自分と周囲との距離感は、

まさに読者と登場人物のそれであったように思う。人とかかわりたくないわけではないと気づいたのは、一人旅をするようになってからだ。前述の通り大多数でのあれやこれやが面倒なので、一人で旅に出ることがよくあった。海外も国内も、あらゆる場所を訪れた。そしてそのいずれの土地においても、私は想定外なことに友人を得たのだ。ロンドンでも博物館をまわった男性、ポルドーの美術館でフランス語を教えてくれた青年、伊豆の旅館で知り合つて翌年の収穫に招いてくれた山形のぶどう農家の老夫婦。ものぐさな私をここまで人との交流に突き動かしたものは、一体何だったのか。それは他人への興味に他ならなかった。他人がこれまででどんな人生を送ってきたか、どんなことを、何を感じているのか。自分の知らないそうしたこととをたくさん聞かせてほしいと思った。どんな些細なことでもいい。たとえば、今日の服はどうやって選ばれたものなのか、お昼ごはんはどうやって決めたのか、夜には何をするのか、とか。

すべての他人は当然ながら自分にとって未知であり、そのことが他人を興味の対象たらしめていた。他人への飽くなき好奇心は今でも留まるどころを知らず、最近では外国語学習のモチベーションにもなっている。いくつかの母語ではない言語を学ぶ裏には、それらを母語に持つ人々のことを知りたいという欲求が潜んでいる。

この文章を書いている今は春の陽気が時折感じられる二月の終わりだが、これが世に出る頃にはもうすっかり暖かくなっていることだろう。東京の五月はもう初夏だ(と、東北から上京した年に驚いたことを、この時期になると思い出す)。そんな季節になったら、外に出てたくさんの人に会いたい。短歌を詠む人にも、今年ももっと会ってみたいと思っている。あなたでも、もしかしたらどこかで会う機会があるかも。もしその時が来たとしたら、あなたがどんな人で、どんなことを考えていて、何が好きなのか、あなたの言葉でたくさん聞かせてほしい。

山桜桃 えみ



小説が未完であるということが誰かの明日を救う夜もある

### 夏がくる

雨虎俊寛

空気が充填したら空がない街を離れて雲青々と平湯からひじ掛けのないシャトルバスふたりの席はもつと近づくと「そしたらねグロキシニアの花束を智恵子はね」ってふんふんと聞く「清水屋に泊まりたいな」とどこまでが本気なんだか林道をゆる木漏れ日に楓の葉脈透けていてぼくも後れて右手をかざす焼岳を大正池が映してる ふたりかつての新聞記事か シャツの裾少し引かれて立ち止まり群れ咲いているニリンソウ見る夏がくる軽はずみには触れられず鳴かない猫の瞳をしてる

### 逝く春

有村桔梗

なで肩をすこし揺らしてとほざかるひとの向かうの春のゆふぐれりんご飴ひとつ灯してぬばたまの夜のはひを少女はゆけり春の闇 眠るわたしのさみしさを類語辞典に見つけだせない 訃報また訃報の流れゆく夜のいいねボタンは押さない指 シロツメクサの茎を束ねてみたゆびをはなせば夢が終はつてしまふ 春暁のうすきまぶたのうちがはにピアノ一台閉ぢこめてある ひさかたのひかりの触れた部分からわたしは朽ちてゆくのだらうね 散々な目に遭ひながら生きてゐるわたくしたちに降れ花ぶぶき

# 連作欄

## 8首の連作

#うたそう 自由詠

ぐちゃぐちゃ

井倉りつ

生活から短歌

石川順一

「ぐちゃぐちゃになった」と君が泣き出して突然最終回のはじまり  
 ひとつひとつ指で溶かしてぐちゃぐちゃのなかから光ることを拾う  
 わからない、こわい、いやだ、と泣く君の世界が変わっていくの見える  
 何も残したくない君の背骨から小さな芽が出て膨らんでゆく  
 きつとずっと昔に枯れた花の種 わたしが登場するより前の  
 その花の色が、匂いが、感情が、甦るのが怖いんですよ  
 それ以上みずをあげたらその花は新しい色で咲いてしまうよ  
 その花の咲く日がきつと最終回 消えてしまえよぐちゃぐちゃのまま

犬だった

池田竜男

E.Tと最後にあいさつ交わしたのE.Tじゃなくて犬だった  
 犬引いて鳥居をくぐるふた腹に棲む細菌を狍犬は見る  
 なめらかに世界に線を引いてゆくつばめのお腹は虫で一杯  
 何度でも等しくあれと防壁に何度でもかまきりは孵化する  
 思いつく一番強い意志の目も塀だお魚啜えたどら猫  
 歯茎のこともすぐに忘れる 照れ笑いするときにも包んでいない  
 ぼろぼろと歯の抜ける夢見た鹿はもう冬の角思いつき出さない  
 日本ハムという名を聞いて吹きだす子となりて犬が落ちたハム食う

太陽は腰に巻かれて居るのかも向日葵なのかライオンなのか  
 いい句の日芭蕉の忌日がやって来る傘の要らない日にビール飲み  
 名の知らぬ人は失礼ポップコーンコーラの後に耐ハイを飲む  
 ゴキブリが母の寝床を襲撃す苦情は心を通じて来たり  
 再びのゴキブリ目撃報告書風呂から出て来た母が即言う  
 名古屋では小雨が降って居るところ電車を降りれば降って居なくて  
 アルバムを見付け出しては母に見せ御菓子を買いに支払いをしに  
 火曜日は朝餉を抜いたままにして閉架書庫から句集を借りる

蜜

一ノ瀬美郷

蜂蜜をかければ甘いひろげれば潮の匂いのする洞窟口  
 ぬちゃぬちゃと粘性のあるガスが部屋に漂う外は夕暮れ  
 好き嫌いせずあまきすずべて味わってきちんとごちそうさまして、えらいね  
 君の目はメープル色で言い訳も嘘も残らず吸い込んでゆく  
 数百年琥珀に閉じ込められた虫 永遠の美をわがものにして  
 綿菓子に頬については溶けていく別れの音がする月曜日  
 水飴に空気を混ぜる透明の飴が濁っていき二人みたい  
 わたしたちこんなとこまで来ちゃったねアロンアルファで癒えない傷は

\\tanka/

冷凍庫にパルム絵本を二冊読み吾子が眠ってくれればパルム

ともえ夕夏

テーマ詠から拝借した  
 短歌をもとにして描いた  
 イラストのなかに  
 10個のまちがひがあります  
 見つけられるかな?

ほっとひといき 短歌で  
 まちがひさがし



Illustration: 千原こはぎ @kohagi\_tw

# 短歌リレーコラム

## 望遠鏡 14

短歌にまつわるあれこれについて  
自由きままに書くページ

今号のテーマと書き手さんは…

書き手

湯島はじめ



「どうして短歌なんですか？」

趣味は短歌ですとだれかに言ったとき、Twitterのフォロワーとはじめて会ったときのおなじみのフレーズだ。

いつも、入社面接のようにはつきりとは答ええない。

この質問に端的に、正直に答えるならば「わたしは短歌をはじめたのは人生がめちやくちやになつたから」だ。

子どものころからものを書き続けていた。大人になり働きはじめてもそれは続けていて、2018年、人生がめちやくちやになつた。そのとき突然、これまでノートパソコンや鍵付きアカウン

トに書いていた創作を誰かに公開したくなった。(もともと、人生は元々がたがたでもっとひどいことも沢山あったが、なぜこのときに限ってこういう気持ちになつたのかはよくわからない。)

でもそのときはまだ短歌をやつていなかった。どころか、この「人生めちやくちやモーメント」までわたしの知っている短歌は小倉百人一首だけと言つても過言ではなかった。

それなのになぜ、数ある表現のなかで、短歌だったのか。いま考えてみると、思い当たることがひとつだけあった。現代短歌を全く知らないはずのわたしの脳裏に、たしかに焼きついている一首があったのだ。

ペガサスは私にはきつと優しくてあなたのは殺してくれる

／冬野きりん

だ。2011年〜2012年ごろだと思う。ジュンク堂書店池袋本店、一棚ぶんの詩歌のコーナー、平積みになされた本の帯にその短歌があった。その本がメディアアクトリー出版の『短歌ください』(穂村弘編著)だ。(のちに『短歌ください』の角川文庫版を購入したが、当然この歌が収録されている。)

短歌って「殺す」とか「ペガサス」とか言っているんだ…と思った。衝撃だった。当然そのときは詩をまともにはやつていなかったたので『短歌ください』は買わなかったし、いつものように本屋を意味もなく一周しているうちにその衝撃は薄まっていった。だけど、家に帰つて短歌をすこし作つたのだった。当時は小説やSS、まれに都々逸なども書いていたから珍しいことではなかった。それですっかり忘れてしまった。

短歌をはじめてTwitterに投稿したとき、七年前に見たきりのこの歌を、この思い出をはつきりと想起できたわけではない。だけど今になってみると、この短歌がずつと、痛くない深い傷のように、火のように、わたしの内部に燦然と存在し、そのときを待つていたかのように思えた。

短歌ブームといわれている昨今。

どうやって短歌と出会い、どうしてはじめたのか。人の数だけ答えがあるのだろう。

あらためて回想してみると、自分のなかにある「フォーチュンクッキー」のおみくじのような一首を発見できるかもしれない。

天馬のくびに涙を擦りつけながら夜の終わりはすずしいにおい

／湯島はじめ

テーマ

(あらためて) どうして短歌なんやろね



屋上猿部14

宇祖田都子

昼休みチョークで描いた空にまで瞼があるの嫌になつちゃう  
ゴールへと渴く地面をひた走るバスに揺られる眠たい地獄  
ひび割れを直線距離に直すのが苦手ね空腹のキューピッド  
うつすらと透けそうだった喉仏ロボットたちが殺し合う駅  
潜水艦行きトロッコで着ぐるみを脱ぐのに肘とペディキュアが邪魔  
トンネルに隠蔽された別荘の母性をつかさどるはずの首  
席替えのパラドックスにうなだれる産毛のうなじがもたらすカルマ  
本当はバクではなくて世界史に出てくる花に巣食う這うもの

大きいTシャツ

泳二

遠ざかるサイレンの音追いかけて自転車漕いでいたらもう夏  
わたしよりきれいな人を撃ちながらあなたを目指す縦シューティング  
あのギターやばいんだよと君が指すフランクフルトの歯形を見てる  
紙コップぬるいビールを飲み干した木陰でキスはまだしなかった  
熱い音と静かな声が耳の奥また行きたいねうん行こうね  
ohayouと素早く打つてしばらくは昨日の音を思い出してる  
大きめのTシャツもらつてからずつとパジャマにしている小さいわたし  
ソーダバー半分こしてあげるから次のお祭りまで溶けないで

山山の架け橋展

大坪命樹

桜花はやり咲くころ君かへりく やうやうことなくいざ二人展ぞ  
初めての個展のしつらへ つとめてに壁立てよひに照明ととのふ  
幕ひらきいかほど客の来ざらむかと案ずる中に一人の影あり  
はじめてが客ぞ知人が文士なる あたたけき情に感謝の念かな  
眷属と朋のおほきに來たるこそ開きしかひの痛く感ずれ  
気づき見て展覧会のごときかたち 大坪藍崎文学館かな  
個展にて文学館が夢あじはう いつか二人にて実現もがな  
客数の五百を越ゆるは喜びにさばかりの疲れぞ相具するかな

眉毛を染める

大橋春人

帰れないふるさとに降る霧雨を見ていつライブカメラの奥に  
醤油やら潮の臭いはわからない海猫の鳴き声も聞こえぬ  
父と似るくしゃみを止めてほしいのだから静かな夜は夜には  
憧れを刺し殺す夜 ふるさとでどこにでもある家庭を作る  
父と似る眉毛を憎む二十代半ばに少し染めてはみたが  
ゆるさない男の暮らすふるさとをふるさとと呼ぶあきらめもある  
あまりにも容易に越えられる父を持てば頭上を満たす春の雨  
透明の傘をかざして雨を受く少しづつ濡れてゆくスニーカー



ストリートビューで雪降る街をみた 二人で暮らすはずだった街  
鹿ヶ谷街庵

テーマ詠「2」。Googleのストリートビューは車載カメラが撮影したもので、天候は撮影日のものだ。「みた」のは一人であろうか、「二人」であろうか。画面には「雪降る街」が映されていた。「二人」は、親子か友達同士かパートナー関係か。「暮らすはずだった」ということは、「二人」の予定が変わってしまったということだ。「雪」の冷たさは、淋しさに通じ、過去に想定された生活と現実との距離の遠さが伝わってくる。

一首評

高橋良

### 葉桜

葉桜はいのちの息吹これからは一年かけて春を熟する  
葉桜に永遠の友情託しては散りゆく花も嬉しかりけり  
各停で葉桜巡り「春はもう真つ盛りだね」茶を飲みながら  
葉桜に希望を託すわれわれが平和に生きる世をつくること  
満開や散り際よりも葉桜の芽吹きこそが命に見える  
ほのぼのと上司の懐妊祝いつつ葉桜芽吹き命は廻る  
葉桜で布を染めたらどうだろうどんな命の色なのだろう  
葉桜に敬意を表しお茶点で遅き春日の野点なれども

緒方燕柳

### 画家をマネしてみたワタシ

美とはもう何か分かった？ ねえ。 謎をふふませ嗤う、僕は未来へ  
美とはまだ分からないから、名画にも落書きをして、これでどうだい？  
キュビズムはベストショットを散りばめた、絵なんだ君の（キスをする音）  
深遠なあなたを見つめ続けられ、細い1つの線になります。  
病弱な僕に異国の文字たちは、トゲトゲしくて目に突き刺さる  
剥き出しの歯と刃に宿る乳白に、猫も女も、今は要らない  
死に際の母の姿を想い描く。敵を討てよ、牛若（の俺）  
鳥獣になってもいと美しく描く、来む世の先の僕らを

歌島孟

### 照明

工房で最も自然なゆびさきでそこから物語に入る夕  
日常よりも日常らしく叫び合う劇 踏切の死に近い音  
うずくまるわたしに気づいてくれるから どんなに間があっても変わらない  
完璧の中で溺れているきみの夜に歪んだ瞳を 見せて  
音程のひとつひとつが All Justice ソファアの上でもそうだったこと  
諦めは存在できない 覗いては何度もスペクトルを探して  
ぶつとびの演技でぶつとびすぎているあなたの日々は真つ直ぐだろう  
照明が切り替わるとき暗闇の方でも彼の生は続いて

かうすま

### 耳鼻科に

ヤマザキのパンのシールを集めては定年の日を夢想している  
柔道の漫画を読んで高校の部活の日々を想い出す夜  
左耳しこりが出来て四十年ぶりに耳鼻科に向向く金曜  
満員の待合室でマスクしてひと月分の日記を埋める  
一時間半後名を呼ばれるまではさんざん悪い予感をしてた  
「良い方の耳から診ます」ドレーンでババと耳くそ吸われ反転  
両方の耳垢取られ「異常なし」断言されて診察終わり  
両音がクリアに聴こえウェルシアでヤマザキパンを買って家路へ

洵れ井戸

告知：短歌の日

短歌の日

# 短歌ウィークはじまる!

～ゴールデンウィークはたっぷり短歌

2023年ゴールデンウィークと同じ期間、**at 4月29日～5月7日**  
『短歌ウィーク』開催中!

この期間、Twitterを中心に、短歌に関するさまざまなイベントが開催されます!  
ゴールデンウィークはたっぷり短歌に浸かりましょう!

★詳しくはこちら! ↓

note: <https://note.com/tankanohi/n/nae2b541b395c>  
Twitter: @tankanohi



短歌の日  
note記事へ

5月7日  
Sun.

短歌の日 最終日は...



## 「#短歌の日ネプリ」

企画スタート

5月7日(日) 0時～

短歌の日でネプリ(ネットプリント)を発行  
します! 「#短歌の日ネプリ」ハッシュタグ  
をつけて短歌作品をツイートすればネプリ  
掲載されます。ご参加ください～!

## 「#短歌の時」

企画スタート

5月7日(日)  
午後5時7分7秒～

特別な時間、短歌の時ときに突入! 「#短歌の  
時」というハッシュタグをつけて「今一番  
みんなに見て欲しい自作短歌一首(過去の作  
品でも新作でも可)」をツイートしてください!

# 一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から  
気になった一首をとりあげて  
200文字くらいで語る  
一首評のコーナーです

うつくしきドロップキックを受け止めて  
倒れゆきたし春の野原へ

有村桔梗

この歌には初句が隠されている。本来の初句は「きみがため」である。と妄想に浸りながら読んだ。ともかく古の歌人もしくはフアンニー・チェリートの姿を彷彿させるような優美な歌だ。しかしプロレスというギミックに引きずられてはいけない。上句は読者を眩ます為の措辞。眼目は下句である。さあみんな揃って春の野に倒れゆこう。まだ僅かに雪が残っているかもしれないが、などと我らをあやしき世界に誘い込むのが目当てだと見た。

一首評

雀來豆

またねって言わなかったな てのひらの  
温度はおなじくらいだったし

井倉りつ

出会いに対して期待しているのか。自分とはどこか違う人・ものへの憧れ。一度の邂逅で触れあえるほどに親しくはなったが、自分との大きな差違を見つげられず、なんとなく白けて別れた。また出会う偶然に、密かに期待しつつ。

自分と同じ温度の人と出会うのは、実は僥倖に近いと、まだ認められない者の体温が感じられる歌。「言」と「温度」以外はすべてひらがなで書かれているのが、結論に至るまでの時間を示している。

一首評

中村成志

缶チューハイの広告が蔓延る渦中にいる  
ときの終わりはかなり気持ちがいい

小泉夜雨

一読して、景が立ち上がるより先にそのエッジに惹かれ、何度も読み返す歌がある。この一首もそうだ。上句で描写される景は独特で、また四句の〈終わり〉(自分は酩酊か別れとして読んだが)が指し示すものは判然とせず、歌意は最後までとりきれなかった。また韻律も大きな破調(12/8/5/7/6として読んだ)を伴う。しかしそれら全てが呼応しあって、読者へ強烈な心地よさをもたらしている、そう思った。

一首評

西鎮

眠らずにあなたのために火を焚べる灯台  
守になりたかった

宮本響

連作「船用航海日誌」からの四首目。おそらくはかなり近い方との別れを詠いまとめたと思われ、大きな悲しみが伝わります。この一首のモチーフは通夜の寝ずの番で、主体は何らかの理由でそれに間に合わなかった、それができなかったと読みました。他の歌にも「こうかい」とあり、それは人生の航海、後悔を示しているのでしょうか。「火を焚べる灯台守」という言葉がとても切なくそして美しく横たわります。

一首評

杜野詩季

うさぎLサイズ二体でちょうどいいって  
□コミを見てポチったの

斌

可愛らしいけれど不気味な一首。可愛らしいと感じるのは「うさぎ」が出てくるから。あと、「□コミ」と「ポチった」の言葉の軽い感じもキュート。なんだけど、上の句が怖い。うさぎに「Lサイズ」ってあまり使わないような気が……ポケモンGO的なやつ？数え方も「羽」や「匹」ではなくて「体」だし……ググったら「体」は人形やロボット、遺体などを数えるときに使われるらしい。きつとぬいぐるみとかaudio的なものですよ？

一首評

西淳子

## 花の盛り

河岸景都

正解が分からない

橘高なつめ

閉じていた季節をたまに思い出す空が灰色に見えた季節を  
どうしても忘れることが出来なくて最初の花を手折ったあなた  
蕾には触れずにいたい、いつの日か大きく開く朝を迎える  
群れで咲く彼らの全て知るために凶鑑を開くことをゆるして  
知らぬ間に芽吹いたものが花になる可能性だけ選びたかった  
花言葉 あなたが夢を諦めたその日に咲いたアネモネは白  
もう何も考えないで済むように差し出せるのは一片の色  
今はまだ秘密のままであればいい花の盛りを待ち侘びている

## 夜に潜る

氷谷雪

あゝ朝

君村類

守りたいものがこの手に多すぎる英雄のポーズふらついている  
(ちゃんとある、戻る場所なら) 夜に潜る 隣の寢息に合わせて、ひとり  
入れ子のような記憶を開けては散らかしていった何を忘れてるっけ  
2011/3/12 病室のテレビに「生かされている」と教わる  
サミシイという鳴き声をGoodbyeの意味だと知らずに茶化してごめん  
短歌など趣味にしたからオパールを涙に喩える感覚障害  
不意にリールを巻かれるように目が覚める闇に毛布を分けてください  
隙間から夜明けが漏れるここからは君との朝餉を浮かべる時間

ひかりさす朝にしめったアスファルトのような泣くしかない夢だった  
トーストがこれ以上なくうつくしく焼けた程度の生きている意味  
身支度を整え終えたわたくしがまともみたいで笑ってしまう  
目覚めても目覚めていない夢へさす午前七時の日差しのみつさ  
逆向きの電車のよくある衝動もSuicaはすべてを記憶している  
英会話・キャッシング・脱毛・土地売買 広告だけがあかるい地下鉄  
一枚の葉として歩く街でまた探してしまいう木があったこと  
葉桜へ変わったことを教えないひとを忘れて起動するパソコン

父の国、母の国にもある名をとマヤと名付くは春の夜なりき  
 母譲りのチョコレートいろの小さき娘に淡いピンクがよく似合ふなり  
 マヤちゃんのパレエが見たいと言へばマヤ「おかねを取るよ」と言ひて踊らず  
 人形であそべば大きなわたあめのやうな髪わが顎をくすぐる  
 「にんげんのおんなのこしか入れない」マヤお城よりくまを投げ捨つ  
 繰り返しくまをいじめるマヤの目のらんらんとして儀式めきたり  
 マヤの見るアニメの英語聞き取れずプリンセスの眉やたらうごめく  
 遊び相手になつてもらつたのはわれか マヤの睫毛をテレビは濡らし

無垢

くろだたけし

知恵のないさまをきれいと言めながら等間隔に並べる桜  
 曲がるのをためらうやうな角ばかり見つけて道に迷つてしまふ  
 おなじとこぐるぐる回っているらしいまっすぐ進んでいるつもりなら  
 浮かれだす前にあわてて処分した天井裏の古いマンドリン  
 廃校の窓はひそかに割れていく森になれない木造校舎  
 雨降りに花は汚れていくところでも立ち止まったのはほんの少し  
 すぐ捨てる読まなくていい手紙でも濡れてしまったことは悲しい  
 ふわふわの綿毛が全部飛んだあとに完了形のタンポポがいる

サトヤんとあいつも呼ぼう誰だっけあいつよあいつ屍喰らい  
 こんにちは今なら一発百万で波動拳くらえますどうですか  
 絶対に暗闇は単数になる途切れることのないものだから  
 私のことどれくらい好き？と聞いてきた奴を連れて行く古井戸がある  
 断りもなく蔵に居る老人と話す少年時代であった  
 いつまでもうしろにいる気がする君と暗い未来を歩いていくよ  
 遠当てでリュックの中の薬瓶を割られる黙つて立ち去つてゆく  
 踊り食いを怖くて見れないと言う子を私は呼んだ屍喰らいと

かどは欠けがち

汐射ハルカ

ふるふると立ち竦むかな絹豆腐四角四面のかどは欠けがち  
 指先が放つ生体電流は茜射す町むらさきのゆき  
 両性を行ったり来たり揺り戻りきようはアルカリあすは酸性  
 甘いのは砂糖だけじゃなく蜂蜜やスクラロースやあなたの甘言  
 精神科ばつくてまた酒を飲むあしたはあした風も吹くだろ  
 終点のバスの墓標は傾いて春の風にもうらぶれている  
 セーターの毛玉が成長していずれもう一枚のセーターになる  
 寝床から青い光が湧いてきて。振り返ると月雲間から出る

増し増しの野菜の下からタンメンを掘りだすようにくずす積ん読

◆ ふじはる

さつきまであなたが触れた表紙から感じる気持ち文字で踊るの

◆ 真岡まな

基本的人権をもつ課長より人間的なSiriに聞く午後

◆ まさけ

サイリウム数万本も震わせてひとりぼっちを歌わないでよ

◆ 深影コトハ

丁寧にていねいに読む紙の上わたしの夢が踊りはじめる

◆ 水也

旅に出る余裕を失くし今までは紙の海ならすぐ行けたのに

◆ 宮岡りょう

人類は火のつけ方が書いてある本を最後に燃やしたのです・・・

◆ 深山睦美

店どこにもないのに「本」の看板がいたるところに 初めての町

◆ 村田一広

天井につくほど高い本棚にたった1冊置かれた聖書

◆ 森内詩紋

本当に息をしているか目覚めては毎晩探す胸の波打ち

◆ 杜野詩季

横顔を垣間見るたび覚えてく窓辺の本の灼ける匂いを

◆ れいあむ

好きになるはずぢやなかつた逆夢は焚書のやうに髪を燃やして

◆ 朧

新刊のサイン会にて直談判怖さなき身で仕事を組んだ

◆ waka\_ino



## テーマ詠 「本」

- 背表紙のタイトル撫でて思い出す君と出会った図書室こと  
 早い夏 野に寝るきみは今日顔に本ではなくて帽子を伏せて  
 ネパール人卒業生に話しかく働き日本語うまくなりをり  
 数学の本に載る題解きながら彼の生誕素数で祝う  
 借りたままの本も前にくれたパジャマも会う口実になってくれない  
 本当は好きだよきみは曖昧に微笑むまるで桜みたいに  
 冷凍庫にパルム絵本を二冊読み吾子が眠ってくればパルム  
 保存用読む贈用陵辱用山羊へ聴かせる用（おまえだよ）  
 性別も次元も種族も関係なく一重へだてて君に恋する  
 成人向け雑誌の消えたコンビニで買うSEX特集の an・an  
 背表紙を指で辿れば世界中巡った気になる名作全集  
 小6の学力ぐらいいしか無いおれが60年も本を読んでは  
 文庫本支へたままに寝落ちするどうやら月が昇つたやうだ  
 午後八時ユポ紙は開きいつせいに花を咲かせる日本列島
- ◆ 白石 夜花
  - ◆ たえなかず
  - ◆ 高橋良
  - ◆ 田中りな
  - ◆ 千原こはぎ
  - ◆ 月草俣津久
  - ◆ ともえ夕夏
  - ◆ 中村成志
  - ◆ 夏西マグマ
  - ◆ 西淳子
  - ◆ 薄荷。
  - ◆ ひなお
  - ◆ 廣珍堂
  - ◆ 福山桃歌

## 待ち合わせ

鹿ヶ谷街庵

夕立ちでこない恋人 濡れながらペットボトルの句を読んでいる  
 君ならばきつと後ろに隠れてる ハチ公前で待ち合わせたら  
 とりあえずビールは大人 とりあえず手をつなぐのは恋のはじまり  
 愛されて育ったきみが大口を食べまくるから食い逃げしたい  
 やや辛い火鍋を序章にしてぼくらマグマを舐めあうようにキスする  
 ラスカルが獣であると知る感じ はじめて君のすっぱい顔をみて  
 大人でもマックでコーラを飲みながら涙を流す夜はあります  
 老犬は子どもをあやすようにして大人の僕のほっぺを舐める

## コーネルの箱

雀来豆

目覚めると姉さんはまだそこにいたばくに手渡すそのぬばたまよ  
 牛乳石鹸の青い箱には青ボタン赤い箱には蟬の抜け殻  
 毛皮の朝食を眺むいつか美術館で暮らすことを夢見て  
 蝶、蜂、妹、群がっている秘密にはしておけなかったばくの花園  
 少しずつ伸びていく首飽きもせず冬の麒麟を見ているばくの  
 FIN ゆっくりと立ち上がるいつか映画館で目覚めぬことを夢見て  
 飼育箱抱えて走る少年の耳に聞こえる静かな唸り  
 ドアノブの辺りに浮かぶ年輪は生きたらうか花降る森を

## ルアー

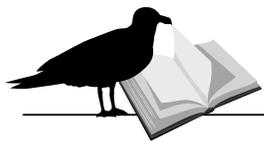
西鎮

ふたりのこと咎めるような朝焼けを背負って駅前まで遡る  
 夏だね、と誰かが言って少女らの群れにひとりの少年匂う  
 砂嵐みたい、だなんて公園で本当のそれは知らないふたり  
 ばれぬように口笛を吹く二秒だけ険しい顔になったと思う  
 ハイエナが骨髄を喰う青空の向こうにもまた新たな戦火  
 遠浅の海にイソギンチャクゆれて誰かをこんなにも思ってもいい  
 プランターにミニトマトの花咲いていて関東平野は夏へと向かう  
 きらきらとひかるルアーを投げ込んだ汽水域めく思春期だった

## エクゾーストノート (1994.05.01)

寿司村マイク

全消灯レッドシグナルからマシンたちが突っ込む第一コーナー  
 終礼のチャイムと同時に廊下へと飛び出す隣りの席の瀬名くん  
 病院に寄るため乗り込む母さんの迎えの車の新車の匂い  
 瀬名くんが走りゆけたただひたむきな帰路を追い越しゆく罪悪感  
 同中の子からのインスタDMの「瀬名死んだよ」はホームの風と  
 元いじめられっ子たちが半数でヤンキーも行く彼の高校  
 通学にバイトで買った自転車が高速のまままでひしゃげたらしい  
 最速の帰路でみんなを置き去った影をなぞって通院をする



言わぬが花

たえなかず

首もとの見慣れたほくる再会はやっぱり人を許してしまう  
かなり先に酔った日 表面張力の大きいグラス越しに名を呼ぶ  
エンターを押して押して押したけど抑えられない感情だった  
おそ春を抜けて花へとカーブする必要以上に語らないまま  
晴れゆえに晴れ くら寿司に合成の愛乗せたままめぐる海流  
退会を押せば不毛な思い出も消えるんでしよう 一気に春が  
ぼっかりと空いた心の穴のむこう のぞいて今夜はおやすみなさい  
優しいか優しくないかで言うのなら優しい赤の他人でしたね

白藤に雨

多香子

この細い腕にきみの一生を支える能なく 銀の雨降る  
白藤は幻を呼ぶ、あの人と別れた五月もそんな夕暮れ  
東京にずっと住んでいるからか貰ったことない「東京はな奈」  
あの人と出会った頃の夏が来る、たいせつに思う翡翠の指輪  
山などは見えぬ都会で真っ白なシャツ干すのは初夏の特権  
気まぐれな花粉症だね振られたら私の涙目また治らない  
はつなつの不穏な日差しにこの胸のセーフティネットが綻びてゆく  
投げられた小石に濁る水たまり私の胸のふかいところ

雪のへ

高橋良

南天の雪をはらへば葉も落ちて白雪のへにいろどり添ふる  
子を櫓こにのせて雪のへ走りゆく空に飛行機見つけたりけり  
年上の子が遊びきて幼子はその大胆さに気圧けされてをり  
友の子はわが家の庭をつらぬける川に遊びて貝をひろへり  
友の町になき菓子店のドーナツを買ひやりたれば友の子もまふ  
職場近き菓子店へゆきフィナンシェを買へる金曜日の休憩  
保育所にくる鬼を追ひはらふことわが子はさきに先生にたのむ  
われ鬼になりたることは知りつつも真の鬼くると信ずるわが子

たごめき

千原こはぎ

君からのLINEが届く賑やかなテレビの音を下げつつひらく  
冬コートの大きな背中 もう夏のおいの夜にすこしさみしい  
期待することも新たな傷となりつき会える日は訊かないでおく  
冷凍庫奥に半分残されたパピコみたいに忘れられたい  
ううん、もう会えないことを嘆いたりしない ノンアルコール飲み干す  
こんなにもきれいな初夏をこんなにも泣きだしそうに踏みゆく木陰  
縦書きの手紙のようにどことなくよそゆきの「おはよう」を聞いている  
またひとつだいたいな熱を手放してテレビの音は大きめにする

本物と嘘のあわいを、僕なりの色で演じて魅せる美術史

◆ 歌島孟

古本屋はしごをしてる天満から梅田でれてれ行く雨上がり

◆ 涸れ井戸

他人とは違う人だと示したい稀覯本だけ集めるように

◆ 河岸景都

正解を教えてくれる先生はほんのことを知らない人だ

◆ 川嶋さち

やってる？と覗けばいつでもやってるみたいな実家の本棚が好き

◆ 氷谷雪

だんだんと本が読めなくなってきたそして短歌は結構詠めてる

◆ 砧

このからだでもどこまで行こう文庫にはしおりになれる紐が揺れている

◆ 君村類

エコバッグわすれ鞆に同居するねぎと歌集と鱈の切身と

◆ 久助

〈読了〉と付けられぬままあたたかい記憶の棚におやすみ、アンネ

◆ 佐藤水魚

本当につらいのですが本当につらい人の気持ちかわからない

◆ サラダビートル

シャーペンを背中にがごと突き刺して終業ベルが鳴るんだ土曜

◆ 汐射ハルカ

燃えつきるシーンばかり読むせいで手垢で黒くなる矢吹ジョー

◆ 鹿ヶ谷街庵

どの犬にも本人は似ていないのに犬に似ている妻夫木聡

◆ 西鏡

残された本に挟んだ押し花の青が滲んで死者を愛しむ

◆ 雀來豆

本棚の学びの履歴これからも私の支えとして並べる

◆ 麻倉ゆえ

何年も返せないまま今もまだ『レモン哀歌』のページに朧

◆ 雨虎俊寛

図書館の書架のあはひにわたくしといふ一冊の本を置きたし

◆ 有村桔梗

かみさまが「やめときなさい」と言っている 4本見送る満員電車

◆ 井倉りつ

窓開けて空気の入替えするように本のお腹をなぞる親指

◆ 池田竜男

絵本借りる事を止めたり二の腕に軽傷を負ふ事に気付きぬ

◆ 石川順一

開かれた詩集に落ちくるひとひらの桜を朧にする昼下がり

◆ 一ノ瀬美郷

行間に機械の身体見失い魂だけが空腹だった

◆ 宇祖田都子

一編の物語の中わたくしは第三章のはじまりにいる

◆ 泳二

◆ 本当はあの本が欲しかった日に図書館背表紙ばかり見ていた

◆ 大橋春人

文庫本一冊ポッケに突っ込んで稚内まで行きかけたが

◆ 大村健太

給付型奨学金で本を買う めちゃくちゃエロい段落がある

◆ 緒方燕柳

歌集ばかり本を並べた棚があり丁寧に紫外線から守られている

◆ 音平まど

日本語のようなくしゃみに振り返るはるか異国の一人旅にて

◆ クラミツハ(四)「幼なじみ」

タツヒコは県立へ行く将来は都会に溶けてしまっただろうか

この夏は雨の多くて祖母の手の届かぬところにある雨雲は

花嫁にしてくれるって約束は龍神に喰われてしまったな

理科室の壊れた蛇口このくらいならわたしでも治められるよ

高校を出て水道屋に就職という道もある まだ十五才

さよならを言へないままに春が来て気づくコーヒーさへも冷めてた  
 さよならが桜みたいにならちらちらと何度避けても避けても  
 さよならと言ったあなたの顔ひとつ皺の変化に気づいてゐれば  
 さよならにすこしの笑顔と花束をきみに贈って春が近づく  
 さよならは残り何回ありますかまた逢へますかまだ寂しいです  
 さよならで夕陽が綺麗に見えるならごめんひとつできみ蘇れ  
 さよならは新たな出会ひの前触れと言つて屠つた過去に微睡み  
 さよならも忘れてきみに逢ひ行くだつて今年も夏が来るから

さよならのカタチ

月草俣津久

あおいはる

つちとて

あおあおあお青々とした草たちが知らぬ間に生い茂ってる  
 むらさきの花をだんだん見なくなりあわてて探すあるはずの場所  
 むらさきの花はほとんどなくなつて葉っぱで探す路肩のすみれ  
 草の葉の色は同じに見えるけどじつと見分ける葉っぱのかたち  
 草刈機に刈られぬようにすつきりとまわりの草をちよきちよきと切る  
 よく見るともみだけれどごくたまに間違つて切るすみれの葉っぱ  
 二年先三年先を見通してリクルートする隣のすみれ  
 「何してるの？」声かけてくる人がいる何も言えない本当のこと

オリオンの右肩

中村成志

背もたれへ頬杖を突き眼を閉じる眠気がとぶと傾いてゆく  
 横向きで寝れば右眼に左眼の涙が沁みて目覚めてさむい  
 陽炎に合わせて息を吸い込めば春が膝から抜けて崩れる  
 オリオンの右肩はもう砕けてるかもしれないって言うときの眉  
 息継ぎの合間に独り言を吐くプールの壁に雪が降るよう  
 踏みしだく人またひとり八重の花そのままに落ち路をふさげば  
 鍵盤に全方位より穿たれてやがて掘り起こされる聖獣  
 さみしさに顔を覆えば人間の最古の器は手のひらだらう

## 初心

夏西マグマ

来たかったとこじゃなくって春雨が甘く降るのにただうたれてる  
青木です美術部でしたお願いします隣は春のような美少女  
横顔とポニテの比率はカンペキで振り向くくさばもつと完璧  
バスケットに入りたいなんてどうしたの。動機は不純トナリはチア部  
見るだけのつもりだったの。図書館で両手に抱えたきみはヒロイン  
伏せた目を縁取る睫毛さえ僕はきみのかたちにきちんと描ける  
時々に触れるその声は爆弾で僕を殺しにかかってきてる  
そんなにさ、良いならそれさ着てるとこ見てみたいとか…赤くなんなよ

## みんな愛だった

奈瑠太

淡いものほど光りが集まるね びーだま、ソーダに結露、たまゆら  
くだらない事ほどよいね 交差点の真ん中通るときジャンプする  
コーヒーも銘柄よりも舌で知る味、有義の外側の味  
愛だった mustや焦りさえきつと産みたて卵みたいなひかり  
やわらかくこの手に乗せた温かさ わたしのほうが抱かれていた  
氷河期が来ても凍土に埋もれても覚えておくね、きつと。サンキュー  
この星で否定されてもしよーもないことで一緒に笑いたかった  
理論とかうんちくとかはそこそこに ねえいまの風に鰻いたよね？

## 邯鄲の夢

れいあむ

空知らぬ雨傘を折り旅にゆくあなたの家はわたしではなく  
一心におにぎり頬張るつむじにも桜ふるふる光ふるふる  
花冷えに咳き込む君の「だいじょぶ」を叱り飛ばせる僕になれた夜  
見慣れない半袖のシャツ着る背中『二度目の夏だ』気づいて泣いた  
店先で麦茶を選んで買ってみただからどうかわたしを選んで  
夜の道匂いたつのは茉莉花の落ちた花びらに似た首もとの痣  
柔らかく下腹に頬をすりよせるあなたを産むのが私であれたら  
そらごとを紡ぐ傍ら祖母の云う「今日はあなたが担当ですか」と

## 希求

臙

やり過ぎと言はれる日日にほんたうはドライアイスを抱きしめてある  
屋上の縁から落ちるサンダルのはつなつはじめから教へてよ  
免罪符なんてないこと太腿に触れるためには夜が必要  
マスクつて人より丈夫（さうでせう）何度もつけて何度もはずす  
当然のことは何だか可笑しくて肌を破れば血の出ることも  
白日夢きみは気弱なナルシスト待つて種火を壊してあげる  
暮らしとはあきらめ誰のかほだつて生温かい剥製だった  
まぶたから新芽が出たら会ひにゆく重心いつも右にかけるね

## にジュー狂さい

西淳子

ナマケモノのパンチを喰らい五年後にやっと痛いとおもう。よかった。  
コンビニの監視カメラに投げキッスした、コインランドリーでもした  
自販機でこいこいをして猪鹿蝶！わたしの野口英世、さよなら！  
ゲーミング割り箸だつて知ってたらオムライスには使わなかった  
バーズデー・イヴだし買った半額のケーキのフィルムのクリームを舐める  
1/2還暦ですよ。何色のちゃんちゃんこを着ればいいのか？  
寝る前のスマホでちゃんとびしょぬれです。光は波で、音も波で  
昼寝したぶんだけ夜更かすする俺を褒めてくれてもいいとおもうの

## ブロンズ少女

薄荷。

ひがし向き玄関横の丸窓にばかりと暢気な朝のおとずれ  
二人してギリギリアウトの遅刻して駅前ですつと舌を出しあう  
つま先が喜んでいる階段をバナナのリズムで駆けのぼったら  
馬に乗る人の彫刻追い抜けば美術館のチケット売り場  
「常設展大人二枚」と言うときのピースサインで世界は平和  
あどけない横顔をした胸像の大きなつばの帽子がおしゃれ  
嬉しくてひだりの頬をおしつける温かいきみの腕の筋肉  
週末の真昼の第二展示室ブロンズ少女のスカートひらめく

## 祥月

和田晴美

もう終わる四月の雨の声を聴くどこの誰でもなくなりながら  
勝ち負けで言えたいい負けの方ゆるくほどける帰途のゆうぐれ  
そこはもう帰れない遠い場所なのに届いた球根から花が咲く  
不覚にも同じ仕草を不意にする妹とわたしそして亡き母  
酔漿草の花は明るくやわらかで大気を乗せていつも揺れてる  
野の草の匂いを知らぬまま猫はもはや老い猫いもうとの猫  
西空にもつとも近い病室の窓があの日のえいえんだつた  
花を買い花を挿し水をあふれさせ現し身は風に煽られやすく

むかし、むかし

森内詩紋

金髪の巻き毛の小さな男の子 池に投げ込むヒナゲシの花  
ぶちの牛 丘まで連れて姫は行く どうか小人にみつからぬよう  
カッコウが啼く間に城に戻るのだ 王の手槍はギラリと光る  
喰いものは別に要らない 欲しいのは後継ぎの子と龍は涙す  
どの義母も同じく継子を虐げる 回れよ回れ水車よ回れ  
狼どん またも狐に騙されて 肉の欠片も皿に残らず  
白樺の森の小人にパンをやれ 惜しまねば良し もし惜しむなら  
「めでたし」で終わる世界で君を待つ 決して沈まぬ白い太陽

春を歩く

杜野詩季

ゆつくりと歩く夫婦を追い抜いてときどき春は振り向き笑う  
都会にも谷があるんだビル街で暖められた風に吹かれる  
国道を行くトラックもタクシーも桜に見惚れて落とすスピード  
込み入ったことの助言は下手だけど美味しい店なら二、三知ってる  
庭砂利に生きる小さな紫の花を摘もうか迷う子の背中  
水はまだ温まなけれど設定を下げる四月のセレモニーとして  
幼な子は上着一枚ぶん投げて跳ねて出て行く賑やかな脱皮  
花びらと寝息を載せて散歩から帰ったベビーカーはやわらか

短い間ですが

優木こまろ

値下げして売れやすくなる商品がありますここは遠浅の海  
ほろほろと風にほぐれる思い入れはだしになって砂浜を踏む  
うつむいて即決願う指先はシーグラスにはなぜかやさしい  
見上げれば先ほど脱いだサンダルが選ばれてゆくカモメでしょうか  
三回か四回空を飛んだので羽根に若干汚れありです  
足音も立てず怒涛は押し寄せて過剰包装という言い訳  
もう二度と戻ってこないその穴に今朝からユビワサンゴヤドカリ  
満潮が結び目になり取引は短い間ですがよろしく

かなしいミッキーマウス

湯島はじめ

のーみそとけてるんだからしょーがないじゃん もちろん誰も笑ってなかった  
誰も近づかない庭でできみが蛾を育ててた誰も見向きもしない夏に  
そのうちに捕まる男のTシャツのかなしいかなしいミッキーマウス  
遠い笛 両手をあげて遠いから踊れるのにねネモフィラのなか  
Googleに入社してあの村を消す 意志を継ぎたい 風にならなくちゃ  
伸びているし冷めているチキンラーメンをむきになって口に入れてる ゆめ。  
らくだ。と思っていたら墮落してみたみたいに入る徴っぽい夏  
うがい薬を買ったストアなくなつてあくびだと思っていいたらなみだ

図書館

ひつじお母さん

暇つぶせ クーラー完備 ありがたく 子どもを連れて 通い借りられ  
チビ連れて 今日はどうして 過ごそうか 絵本を読んで 絵本を借りて  
返却日 ハンコの日付け カレンダーに 予定がうるまる 安心感  
良い絵本 何回読むも あきたらず また本日も 新たな発見  
誘っても 行きたくないと 断られ 一人で行くと 自由で寂し  
手が離れ 一人で来たが 探すのは 子どもが好きな ちいかわの本  
久々に 行ってみようと 図書館に 夕行を探せ 俵万智さん  
しばらくで 破棄されていた 我がカード コロナとチビが 落ち着く年月

春をゆく

廣珍堂

病院の帰りに立ちしバス停の庇の影の温かに揺る  
アパートのベランダを知る春霞花粉症なるひとの声して  
葛折りの古き街道上りゆき立ち止まるとき野鳥渡りぬ  
スーパールのなかにもいよ陽の匂い来たりて野菜売り場を巡る  
新ジャガの土を洗へば水の音窓より軽き風を呼びたり  
草の芽の並ぶ子供の遊び場にアパートの親子笑ひ合う午後  
電車待つひとはコートの前を開け里山の風ふはり含みむ  
準備せし人事異動はあらずしてパソコンにある付箋眺めつ

なぐり

ひなお

雨の日だが4時になった傘さして犬と散歩に出よう桜も咲いている  
花びらが歩道の上に吹き上がる 自動車は走り去り  
公園のベンチ 生は死の始まり ワンカップ持つ手に花びら  
桜は雨の日に見るのを好む幹くろぐると花がきわだち  
四分咲きになったばかりに花びらがもう散っている散歩路のうえ  
毎年のことだが桜が満開になると鴨がきて騒がしく鳴く  
舗道に散り敷いた花びらがつむじ風にくるくる廻る  
喧しく枝移するヒヨドリも見えなくなった葉桜の山

同じ夢

福山桃歌

落ちていく星はきれいで夜空ごとさかさまになるような朝焼け  
いつだって夜しなくて寝待月 欠けたとこまでやたら明るい  
海の中には火があつてぼうぼうと激しい色で海月が燃える  
どこまでも続くみたいな道すがらすれ違つても気づかないまま  
伏線がこんがらがって真実にたどり着かない登場人物  
さみしいと言わないことを強さだと信じていたかったんだ(ごめんね)  
苦しさを吐き出せなくて膨らんだ肺がはじける やたら痛いな  
また朝に戻るよ同じ夢の中ベトリコールは涙のにおい

## よわよわ夜話

藤尾舟

ただ眠る部屋を奇跡は訪ねないせつかくファミマの音のドアホン  
 どの部屋に暮らしたときも心臓であった冷蔵庫、当然と点る  
 眠りたくて冷蔵庫前によこたわる靴脱ぐ国のみかげのひとり  
 無き家のここの呼び名は何だった だいどこ、みずや、流し、母さん  
 排気音派手におかえりブルージーンきみんちの洗濯機聴かして  
 「ライナスの毛布」 厳密に毛布ならライナスごと洗うのも骨だな  
 急速充電中のたましいたまっていくようなロック画面にまもられたいよ  
 何も無い冷蔵庫でも開けてみるウーンがブーンに変わる生きてる

## スーパーマリオブラザーズ

まさけ

人生をやり直せればと思いつつ何度も踏んだカメのクッション  
 原色のキノコや花を摘んでいる多分食べたら胃を焼く系の  
 誰のものでもない金がすぐ欲しい 夜の光がコインに見える  
 夏の夜に弾けた花火 ヤケになり蹴倒し周る飲み屋のノボリ  
 気がつけばそこは保護室昔みた動物園のゴリラを思う  
 真夜中に引き取りに来た弟と無言で帰るポロイマンション  
 絶世の美女を助けて目が覚めて見えた壁にはカメ形の染み  
 仕事なく彼女もいない兄弟の配管工の夢のおはなし

## 天気の子

深山睦美

ああやって死ねたら良いね欠航の決まった便は雪を纏って  
 私にも言ったことない綺麗だを飛行機なんか言うんじゃないよ  
 整備士に内緒で小さなラジコンを飼いたいと思うジャンボであった  
 ヤンデレの遣らずの雨はすごかった 土嚢を準備しだすヤンデレ  
 遠足に行けるかどうかはC組のてるてる坊主係次第だ  
 遠足は中止であると伝えても彼はてるてる坊主をやめない  
 結局は晴天でした。あいつさえ無事なら今頃遠足でした。  
 後任のてるてる坊主係には自分以外を吊れと伝えろ

## 愛犬・リック

三好碧

目が合った利那隣に来てたよね なんの迷いもない足取りで  
 前世でも君を飼っていたのかな君の身体は僕に馴染みて  
 捨てられて野を彷徨いし時もあり時々覗く君の悲しさ  
 強風に吹かれてつと立ち止まり君を留めた何かの記憶  
 雪に触れ抜き足差し足そろそろと戸惑う君はホントに犬か？  
 「『どいて』という言葉は僕は嫌いです」膝の上から動かぬ老犬  
 愛だけを抱えた天使だったから？ はじめて消えた泡沫の君  
 金賞を贈呈します。十年の幸せくれた君の一世に

## ドライフラワー

深影コトハ

いつからが蕾で花で実だろうか友は見るたび美しくなる  
 レモネードはじけて消える 一つ 告げられたのは残酷な真実  
 すれ違うバギーを見つめて微笑んだあなたはどの河岸に立つ  
 あなたにも幸せなことがある なんて言えないだつて言われたくない  
 押し黙る私とあなたの境界を西陽がじわじわ目立たせてゆく  
 雨の日に躊躇なく白いパンプスを履く人の黒いべたんシューズ  
 お揃いのクッキー缶をお土産にそれぞれ違うお部屋に帰る  
 皆生きてゆく 神さまに手折られた願いをドライフラワーにして

## とどかない雫

水也

もういないもういちどだけ会いたい雨の雫とうたってほしい  
 永遠に変わらない花さがして散らずにいてとさげびたかった  
 ミルク色した罪の帆がゆれている流言という小舟のなかで  
 夜明けなど乞わないでいる朝焼けはすべてをやっていたむばかりだ  
 夢みたい真つ白なゆめみている手のひらのなか残らないまま  
 雪解けよわかつてるから目をつぶるなにも言わずに蹲らせて  
 終わらない時はないからなんていう決めつけないで終わらせないで  
 とどかないひとはじめから知らないでいたらわたしは変わらなかった

## 上手く答えられない

虫武一俊

点滴を失敗されて左腕に中二のごとき黄色いあざは  
 入院の天井にまだ思い出す自分のなかの碇シンジを  
 早く死ぬつもりはないが一〇〇歳と言われると上手く答えられない  
 死のことを思う若さの陽だまりに何かを埋めましたか、あなたも  
 俯いて歩く湿っている土の臭いのような歌ばかり作り  
 電波時計を二十四時間分回し三分ずれの長針を直す  
 もやしの髭を抜きつつ社会の不正義を思い出してはいらいらとする  
 インソールを入れようとしてインソールをもう入れていたことに気がつく

## 蝶のやうになれたなら

村田一広

明日までに売り切れるのか山積みの賞味期限が迫るプリンは  
 シウマイ弁当買ったつもりで開けたのに中身は全部シウマイだった  
 暑くも寒くもなく雨も風もないコンビニの眩き別世界  
 お花畑歩いて行かう蝶のやうに少し体を浮かせて行かう  
 風船なら割れた棘のあることも知らずに薔薇に手を伸ばしてた  
 おろしたてのスニーカーは冷たい雨に驚いて足を締め付けてくる  
 鉄のコンピューターに囲まれた部屋で唯一ベッドだけがふかふか  
 スマホ打ちながら耳のどこかでポルシェのエンジン音聞き分ける